

私の読書日記

H-73 長崎にて

×月×日

八月九日の原爆記念日前に、長崎を訪問してきた。私は長崎の爆心地生まれである。爆心地の写真を見ると、焼野原に数棟の立派なコンクリート造りの建物が残っている。あれは長崎医大附属病院。私はそこで原爆三ヶ月前に生まれた。いまそこは原爆関係の研究所や資料センターになっている。案内していただくと、驚くほど多種多様な資料がギッシリ詰まっていた。

そこは爆心地から水平距離で約六百メートル（実際の爆心は地上高五百メートル）。爆発後数秒でそこに太陽が出現したと同様の大火球が広がり、超高温ですべてを焼きつくした。

私が長崎で生まれたの

は、父が活水女学校で国文の教師をしていたから。その頃の教え子の一人に、秋月さんが子きん（91）がいる。被爆者の生き残りとして最も有名な方だ。秋月さんは、爆心地から千四百メートルの浦上第一病院で看護婦をしていた。同病院の医師秋月辰一郎とともに、被爆直後から、押しかける無数の被爆者の救護にほとんど不眠不休であたった（二人は三年後に結婚）。

長崎の被爆医師として『長崎の鐘』『この子を残して』などの著者、永井隆博士が有名だが、永井博士が、戦後わずか六年しか生きられなかったのに対し、秋月医師は戦後六十年生き延び、「長崎の証言」運動を組織してはじめて被爆者の

体験記録集を作った。その後も反核運動、平和運動の中心にありつづけた。私は知らなかったが、父は亡くなるまで秋月夫妻とずっと交遊関係があり、死後遺品を整理したら、夫妻とやりとりした手紙資料が沢山出てきた。最近地元の新報に秋月さんの消息が報じられたのをきっかけに、連絡をとって長崎訪問となった。

お会いしてみると、九十一歳という年齢がウソのように思えるほどお元気で、アツと言う間に医師からOKが出ていた二時間という面会時間が過ぎてしまった。お会いする前の日に、長らく絶版状態だった秋月医師の原爆体験記の古典的名著、『死の同心円』（長崎文献社 1600円＋税）の

ノンフィクション作家  
立花隆



『死の同心円』

復刻版ができあがったというので、そのサイン本をちょうだいした。

「死の同心円」とは、爆心地から放射能の強度に従って、見事に同心円を描くように原爆の被害が広がったことを意味する。爆心地から五百メートル以内には人はすべて即死するか、一週間以内に全身火傷ないし急性劇症でバタバタ死んでいった。次の、爆心地から五百メートルないし千五百メートルにいた人々は、次の四十日間で、食欲不振、

全身疲労、髪の毛が抜ける、全身に出血斑が出る、白血球が急激に減少するなどの症状が次々に出て、ほとんどが死んでいった。今日は爆心地から〇〇メートルまでの人がすべて死んだ。明日はその輪がさらに〇〇メートル進むだろうと思っていると、現実にならなかったという。

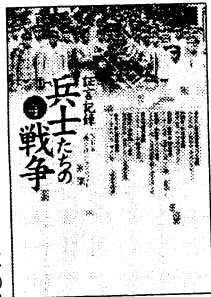
永井博士の『長崎の鐘』はセンチメンタルな部分、宗教的な部分が多くて読みにくい、秋月医師の『死の同心円』にはそれが無い。あくまでクールに事実だけを書いていくから説得力がある。

この背景に、実は米軍による検閲の問題があった。堀場清子『禁じられた原爆体験』（岩波書店 2233

たちばなたかし 1940年長崎県生まれ。『宇宙からの帰還』『サル学の現在』『滅びゆく国家』『ほくらの頭脳の鍛え方』（佐藤優氏との共著）ほか著書多数。

円十税)、繁沢敦子『原爆と検閲』(中公新書 760円十税)を読むと、占領軍が、原爆に関しては極端なまでに情報を秘匿し、原爆被害の実相を隠そうとしていたことがわかる。厳しい検閲で、事実上出版の自由を奪った。日本人から奪っただけでなく、欧米のジャーナリストからも奪った。

長崎に一番乗りしたシカゴ・テイリー・ニュースの記者が書いたルポ『ナガサキ昭和20年夏』(毎日新聞社 2800円十税)は、ずっと発行が許されず、初めて公刊されたのはなんと二〇〇七年である。永井博士の『長崎の鐘』だけが、なぜ一九四九年に発刊を許されたのか。「浦上が選ばれたのは、浦上に供えられたる事を感謝致します。この貴い犠牲によりて世界に平和が再来し、日本の信仰の自由が許可されたことに感謝致します」という、「浦上燔祭(神に捧げられた尊い犠牲)説」のコンテクトがGHQによってよしとされたこと。『長崎の鐘』の初版本の後半分に「マニラの



証言記録 兵士たちの戦争④

悲劇」というGHQ提供の一文を入れ、日本軍がフィリピン占領に際して行った残虐行為の記録と抱き合わせにしたのが理由だ。

このような取引は、永井博士にとって不本意なものだった。そこで博士は、小学生の作文なら検閲の目を逃れられるだろうと一計を案じた。爆心地に最も近い小学校・山里国民学校(在校生千三百人のうち千百人がほとんど即死。二百人だけ生き残った)の学童三十七人に作文を書かせ、『原子雲の下に生きて』(アルバ文庫 580円十税)と題する作文集を出した。この作文集は、今も長崎の原爆資料館で売られつづけ、永遠のベストセラーになっている。これは一読口もきけなくなるほどのショックを与える作文集である。

長崎から帰る日、書店の

店頭で長崎文献社の新刊本、川上郁子『牧師の涙』(600円十税)を見つけ帰途読みはじめたら、これもすごい本だった。帯に「作家川上宗薫の母と妹二人は、原爆の直撃をうけ、焼け跡から白骨化した姿で発見された。牧師で音楽教師だった発見者の父は、衝撃のあまり牧師を辞めた」とある。川上宗薫は少し年配の人なら皆知っている昭和末期随一の「官能作家」。作者は宗薫の義妹。いまも八〇代で長崎に住む教育者。ここに書かれていることは全て百%の実話だ。川上一家は爆心直下の松山町の住人。松山町はこの地上から一瞬にして消え去り、廃墟となった。いまはその辺一帯が爆心地公園として保存されている。宗薫は出征中で家になかった。父は学校に行っていた。夕方帰ると自宅周辺はただの焼け野原。翌日自宅のあったとおぼしきところを丁寧に探すと、白骨化した母が右手と左手にそれぞれ白骨化した娘二人をかかえた形の三体の骨を見つけた。それだけだった。

爆心地公園はただのダダっ広い空間である。そこが爆心だったことを示すモニメントと説明パネルがあるだけで歴史のリアリティは何も見えない。この本を讀んではじめて、当時の爆心地のリアリティが見えてきた。そして、あの官能作家の背後にこんな個人史があったのかとビックリした。そういえば川上宗薫のエロスあふれる文章の背後に何か巨大な虚無を感じさせるものがあった。

×月×日  
今戦争の時代をリアルに知る層は、みんな八〇代、九〇代になりつつある。このままいくともなく日本から戦争の記憶はかき消えてしまうだろう。そういう焦燥感にかられてか、最近、戦争を語る老人たちが増えてきた。出色だと思っただのは、『証言記録 兵士たちの戦争④』(NHK出版 2200円十税)。二〇〇七年から始まったNHKの『戦争証言』プロジェクトから生まれた本。これまでNHKの戦争ドキュメン

『ぼくの血となり肉となった五〇〇冊』そして血にも肉にもならなかった一〇〇冊(小社刊)には、この連載の五十回分も収録されています

トとちがい、戦争の現場にいた兵士たちのナマの発言記録から戦争の実相を探ろうという姿勢がいい。

しかし知れば知るほど、あの戦争がいかにデタラメであったかという事実が浮かびあがる。たとえば、ガダルカナルの第二二八連隊。二五〇〇人が送り込まれ、帰還できたのは三〇〇人だけ。連隊長から兵隊まで、皆自分たちがなぜここに送り込まれ、何をしていくかがわからない。現場では、ジャングルの闇の中でどつちを向いているのかもわからない(地図もない)。弾薬なし。食糧なし。情報なし。結局、ほとんどの兵が餓死するか、無意味なパンザイ突撃で死んでいった。ヒロシマ・ナガサキで被爆死した人々は、いったいなにが起きたのか、いまま自分たちが死につつあるのか、なにものみこめな いまま死んでいった。同様

『私の読書日記』は、立花隆、池澤夏樹、山崎努、酒井順子、鹿島茂の五氏が毎週交代で執筆いたします。